家相図から暮らしを読み取る

森　　隆　男

1　はじめに

調査のため旧家を訪れると、大切に保管されていた家相図を見る機会がある。家相図は陰陽五行説に基づいて住まいの位置や方位、間取りなどの吉凶を判断するために作成された図である。近世後期に長崎貿易を通じて中国から風水に関する書物が輸入され、それをもとに大坂や江戸で家相書が出版されて全国に普及していった。近世末期からは家相書の知識を習得した人たちによって家相図が作成されるようになり、明治・大正を中心に流行したが、昭和初期には衰退していく。

家相図には当時の敷地や建物の平面、作成者と作成年月日などが記されている。また火に関わる竈や水に関わる井戸、そしてケガレに関わる便所などが明記されており、現存する住まいの情報を重ねることで生活の変容をさぐることができる。

奈良県生駒市高山町の旧家である尾山一洋家には、大正４年に作成された家相図が残っている。作成者の高阪定一について詳細は不明であるが、「大日本宅相方位鑑定師」の門人と名乗っている。宅地と家相の判断は別の図で示すと記述され、ここには当時の屋敷と母屋、付属屋がそのまま描かれている。とくに母屋の間取りだけでなく土間の設備や付属屋についても詳細に記されており、本稿では、この家相図に記された情報から大正当時の当家で営まれた暮らしの一端を読み取ってみたい。

2　尾山家の概要

尾山家の母屋は茅葺の入母屋造で、現在は瓦風のトタンで覆われている。この建物は明治に２代前の当主が他所のすまいを購入して移築したもので、慶応年間の棟札があったと伝承されている。

写真１　尾山一洋家　外観

昭和50年ごろに改築されたため外観は新しく見えるが、玄関の大戸や土間の一部に古民家の名残りを見ることができる。土蔵や堆肥舎、納屋、井戸も当初のまま残存している。しかし敷地の南東部に母屋から離して建てられていた風呂と大便所が撤去された。これにより母屋への進入路が南側から南東側へ変化し

写真２　大戸と土間に残る古民家の名残り

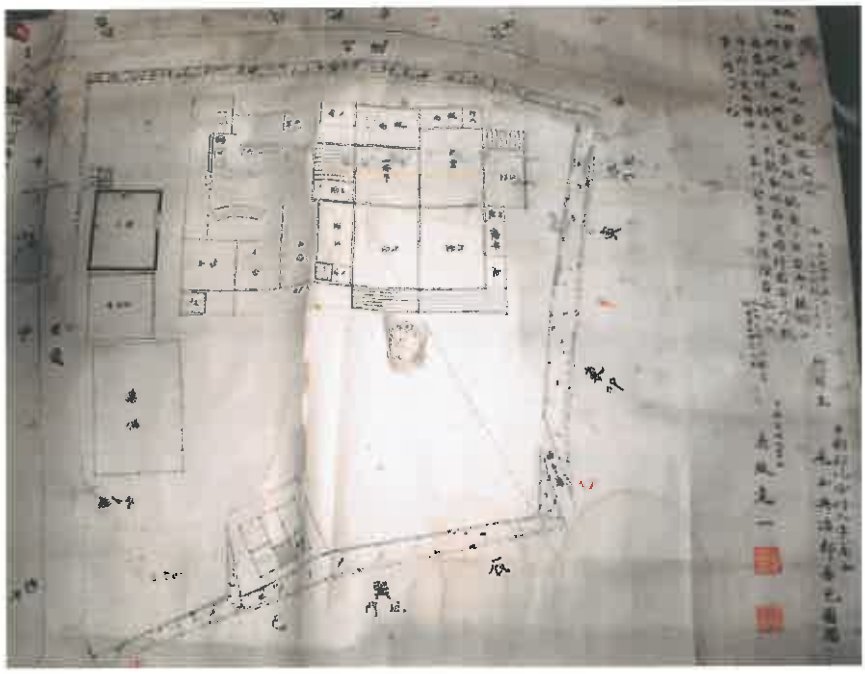

写真３　家相図（大正４年）

た。

家相図に描かれた母屋の間取りは四間取りを基本にしている。オモテ側では玄関の大戸口を入ると広い土間に至るが、竈との間に建具があり、客の視線を遮断している。玄関と3畳、次の間、床の間を備えた客間を結ぶ接客の導線は、日常空間と明確に区別されている。ウラ側では土間に面して板敷きのヒロシキを設けている。ヒロシキは大和・河内地方の農家で一般的に見られ、昼食の場に充てられることが多い。4畳半は居間、6畳とその奥の3畳は寝室である。家財の収納スペースが多いのも当家の特色であろう。

母屋の間取りや、仏壇と神棚の位置に変化はみられない。しかし土間部分には一部を残して床が張られ、水甕と調理場は床上に移された。土間に設置されていた唐臼と、人の食事や牛の飼料の煮炊きに使用されたアーチ型の5穴の大型竈も撤去されている。また「牛欄」と記された厩は改築されて部屋になっている。これに接して軒下に設けられていた小便所も撤去されている。背景には上下水道の普及と燃料の変化がもたらした暮らしの変容がうかがえよう。

3　合理的な部屋と設備の配置

この家相図から、100年間に当家の住まいに施行された主な変更箇所は、土間と付属屋であることがわかる。

まず風呂と大便所が一体になった付属屋から検証しよう。昭和6年生まれの現当主も、このような形態の付属屋については記憶がないという。家相図では赤線が開口部、一重線が壁、二重線が框（かまち）を示しているので、当時は風呂と大便所は、簡易な扉をつけた程度のオープンな構造であったようである。大便所の窓が記されているので用を足す際に座る向きがわかる。風呂と大便所は壁で仕切られている。風呂の焚口の位置も記され、風呂桶と洗い場には煙が流れないように壁がある。洗い場には板のスノコが敷いてあった。大便所と風呂が同じ付属屋に配置されているのは、使用後の風呂水と洗い水を便槽に流し、糞尿を薄めて下肥として利用するためであろう。この付属屋の位置は、隣接する「宅外畑」などに下肥を運ぶ上でも便利であったと思われる。

写真4　風呂と大便所の付属屋

母屋の厩に隣接して設置されていた小便所には、大型の便槽が埋められている。牛の糞尿を小便所の便槽に導く溝が切られていたと考えられ、やはり下肥として利用する構造が認められる。家族だけでなく来客にも小便を提供してもらう配置でもある。化学肥料が普及するまで、農家の住まいは肥料の生産工場でもあった。

土間に面して食事の場であるヒロシキ、台所道具が収納されていたと思われる物入れ、井戸、厩が配置されている。また土間には唐臼、「走井」（流し）、水甕、竈が設けられている。水甕が井戸の横に置かれているのは水を運ぶ手間を少しでも省くためであろう。すなわち土間で家族の食生活と牛の給餌がほぼ完結することになる。

このように、土間が日常生活の中心であった当時、各部屋や設備がきわめて合理的に配置されていたことを知ることができる。土間の消滅は日常的な暮らしの変化を反映したものといえる。今後、このような視点から、住まいの中で土間がもっていた機能を再検証する必要があろう。

4　むすび

都市では大正に入ると生活の改良が始まり、台所や便所などに新しい設備が導入されるようになった。農村でも都市に遅れるものの同様の動きが始まり、第二次世界大戦後に本格的な生活改善運動が展開された。現存する住まいには、すでに半世紀前の暮らしをさぐる情報を見つけることが困難であるといってもいい。家相図の多くはこのような変化の前に作成されており、すでに見ることができない住まいの情報をビジュアルに提供してくれる。

本稿で紹介した尾山家の家相図は、大正当時の住まいが生業である農業と密接に関わった合理的な空間であったことを示している。また日常の暮らしが土間を中心に展開していたことも教えてくれる貴重な史料といえよう。

文学部教授